

TOKYO CITY CANVAS

東京都は、工事現場の仮囲いなどをキャンバスに見立て、街にアートの景色を広げていく新たな文化プロジェクト「TOKYO CITY CANVAS」を2024年に開始。都有施設での東京都事業と民間企業等が行うアートプロジェクトを対象とした助成事業により、都内各地でプロジェクトを展開

2024年度 第1期 TOKYO CITY CANVAS助成 採択事例 三菱地所株式会社「YURAKUCHO ART SIGHT PROJECT」

◆企画内容

- ・アーティストによる街の地理的・歴史的なリサーチを通じた新作を仮囲いで公開
- ・広く街の人びとの間に豊かな交流をもたらすことを目的としたプログラムを展開

◆採択のポイント

◎地域からインスパイアされた魅力的な景観の創出

街のリサーチを通じて制作された大規模な作品は、その街で作品を展開する必然性もあり、また、掲出された作品を通じて、来街者が地域の魅力を再発見し、未来の街への関心や期待感を高めることにつながる

◎気鋭若手アーティストの登用と新しい創作の場の提供

気鋭の若手アーティストを中心としてキュレーションし、若手アーティストの新しい作品発表の機会を提供している

◎発信力・訴求力

作品の魅力を多くの方に伝えるため、広報活動に力を入れている

【参考】地域の特性を活かしたアートプロジェクト事例（都有施設での東京都事業）

都立駒沢オリンピック公園 「Symbiotic Landscape」



- ・「みどり豊かな景観との調和」「様々な世代・背景の方が利用する公園との親和性」をテーマにしたアーティスト原田郁氏のアート作品
- ・東京2025デフリンピックのテーマカラーである赤・青・黄・緑を基調に用いた高さ3m・幅90mの大規模アートで、開催への気運醸成や共生社会実現に向けたメッセージを発信

東京都庁第一本庁舎 1階中央エントランス前 「みずのはし」



- ・かつて「淀橋浄水場」の水底だったことに着想し、人と人、記憶、文化が混ざり合う大きなうねりを『水の文様』で表現したアーティスト大巻伸嗣氏によるアート作品
- ・複数の仮囲いや橋脚を利用した大規模インスタレーションにより、来街者がこの地の歴史と記憶に没入できる空間を提供

東京都江戸東京博物館 「写楽の眼」



- ・江戸博のロゴデザインの元となっている「市川緞蔵の竹村定之進」の目に込められた思いを、アーティスト小牟田悠介氏と地元の中高生が様々な視点で表現
- ・浮世絵(版画)の仕組みをスプレーとステンシル(型紙)で再解釈した手法により、高さ3m・幅約30mの壁画を制作